

## 「災後」に問われる文化の社会的役割

ニッセイ基礎研究所 主席研究員

吉本 光宏

あの日から2年が経過した。

震災の記憶を失ってはならない、とばかりに、3月11日前後には震災関係の報道が相次いだ。しかし、あの日を境に、日本の何かが変わるかもしれない、いや、変わらなければならない、といった思いは、徐々に薄れているように思えてならない。そして、被災地の復興にはまだまだ時間を要する状況だ。

東日本大震災は、日本の文化にも大きなインパクトをもたらした。

文化施設は大きなダメージを受け、東北沿岸部では未だに再開できない館もある。首都圏でも天井落下の被害にあったミュージアム川崎は、今年の4月1日によりやくリニューアルオープンする。この事実は、大震災の被害がいかに大きかったかを物語っている。

一方で、震災直後には避難所として機能した文化施設も少なくない。いわきアリオスもその一つだ。現場の声に基づいてまとめられた震災後の1年間のドキュメントは、当時の様子を生々しく伝えている<sup>1</sup>。施設が閉館状態の中、同館では市内の学校などにアーティストを派遣する「おでかけアリオス」を積極的に展開した。

文化施設は地域にとってどんな役割を担ってきたのか、担うべきなのか。今後どこかで発生するであろう大地震に対して、各地の文化施設の備えや心構えは十分だろうか。大震災はそのことを今も問い続けている。

アーティストやNPOは、震災直後から被災地にかけつけ、泥かきをしながらアートならではの支援や復興活動に取り組んできた。立体造形やパフォーマンスなどで風刺的な表現を行うタノタイガさんが続けた「タノンティア」、音楽家の大友良英さんらが立ち上げた「プロジェクト FUKUSHIMA!」、吉川由美さんらが南三陸町で

展開してきた「“生きる” 博覧会」や「南三陸・未来を歌に」等々、数え始めればきりがない。

水戸芸術館現代美術ギャラリーでは、そうしたアーティストたちの取り組みを俯瞰する展覧会「3・11とアーティスト：進行形の記録」を昨年10月から2ヶ月間開催した。23組のアーティストが展示したのは「作品」ではなく、彼らが震災後に行った芸術的な営みである。それらは、TVや新聞で頻繁に報道された被災地を訪問する芸能人やタレントたちのアプローチとはまったく異なっている。芸術に何が可能か。東日本大震災の災禍を目の当たりにし、そのことをアーティスト自身が自らに問いかけ、行動した記録とも言える。

アートNPOリンクは、今年1月末に全国アートNPOフォーラム in 東北「東北でしあわせを考える」を開催した。アートによる被災地支援や復興活動が紹介されるとともに、「震災後に見えてきたアート／アーティストの存在」について議論が交わされた。「わわプロジェクト」は、昨年に続き3月にアーツ千代田3331で「つくる事が生きること」東京展を開催。現在も東北で復興活動に力を注ぐ人々やアーティストによる継続的な取り組みが紹介された。

そうした活動を支えようと大震災の発生から12日後に設立されたのが企業メセナ協議会の「東日本大震災芸術・文化による復興支援ファンド (GBFund)」である。これまで8,630万円の寄付が寄せられ、153件の活動に8,100万円が助成された(3月19日現在)。「被災者・被災地を応援する目的で行われる芸術・文化活動」と「被災地の有形無形の文化資源を再生していく活動」の二つが対象となっている。2年目から特に力を入れているのが、被災地の祭りや郷土芸能の応援である。2012年3月にはニューヨークのジャパン・ソサイエティーの支援を得て「百祭復興プロジェクト」を設置、同分野への助成を強化した。

1. ニッセイ基礎研究所・いわきアリオス編著、文化からの復興：市民と震災といわきアリオスと、2012年7月、水曜社

東北は芸能や祭りの宝庫である。津波で道具や装束が流されるなど甚大な被害を受けて存続の危機に陥ったところも少なくない。例えば岩手県大槌町。町内には、虎舞、鹿踊り、神楽など 22 の伝統芸能が現存している。毎年秋には町内の小槌神社にそれらが勢揃いして例大祭が開催されていた。一昨年は開催が危ぶまれる中、何とか有志で実施し、昨年は 22 団体中 17 団体が参加して開催の運びとなった。

震災前の大槌町の人口は約 1 万 6,000 人。大震災で約 1,300 人の方々が亡くなられたり行方不明となり、人口は大幅に減少した。被災者を含め今では町外で暮らす方々も多いという。昨年の例大祭では、そうした町民の多くが大槌町に戻ってきた。このことは、地域の誇りや人々の絆を支えるのは文化に他ならないということを示している。

芸術や文化は、今では劇場や美術館で鑑賞したり、趣味の対象だけの存在ではなくなりつつある。教育や

福祉、まちづくりなど、様々な領域において社会的課題と向き合い、それが革新的なソリューションに結びつく事例が各地で報告されている。それらを、芸術の手段の価値に偏っている、と見る向きもあるが、芸術は社会と切り離して存在することはできない。

東北の芸能や祭りは何よりもそれを物語っている。現代の劇場や美術館は、一部の例外を除けば、明治以降西欧から移入されたものである。芸術という概念自体も同様だろう。だとすれば、日本における文化や芸術のあり方は、もう一度問い直されても不思議はない。

大震災以降、各地で展開される文化や芸術による支援や復興活動の広がり。それは「災後」という大きな時代の転換点を経て、日本における文化や芸術の社会的役割、価値を問い直す試みに他ならない、と筆者には思えるのである。

## NEWS for Cultural Economics .....

2013 年  
6 月 29・30 日  
(土・日)

### 2013 年度研究大会は、東京都文京区で開催されます

## 大会テーマは

## 「文化と経済～理論・実証・政策と『現場』」

6 月 29 日、30 日に 2013 年度年次大会を東京大学本郷キャンパスで行います。学会ホームページの記録と私自身の記憶から、秋の講演会は何度か東京で開催されましたが、年次大会は初めてのことのようです。

さて日本中を巡り巡って初めて東京で開催される今回の大会テーマは、昨年度国際学会を誘致した研究実績を考慮し、地域固有の問題を扱うというよりは、むしろ文化経済学が扱う内容について学会として真正面から斬り込むことを目指し「文化と経済～理論・実証・政策と『現場』」としました。

芸術文化支援の現場を支える様々な制度の具体的な構築は、文化経済学会＜日本＞が発足して以来の最重要研究テーマであったといえます。そしてそれは研究者達のたゆまぬ研究努力や審議会等での政策実践への積極的関与の成果として、完璧とはいえないまでも一定程度の望むべき制度設計がなされてきたといってもよいかと思います。

たとえば、NPO 法の制定と改正、文化芸術振興基本

法の制定、公益法人改革、芸術助成機関としてのアーツカウンシルの設立、そして劇場・音楽堂等の活性化に関する法律等々、芸術文化支援政策の環境や具体的な制度は、この 20 年の間に劇的に変化を遂げてきたといえます。これからは、これらが「適切に」運用されることによって、文化の現場が発展的に活動を展開していくことが望まれます。

そこで今回は、まさにこの学会の普遍的なテーマである「文化と経済」に関して、三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング理事長の中谷巖氏にご講演いただきます。そして続くシンポジウムにおいて、制度を運用して支援する側、支援される側の両面から問題提起をいただき、この分野における理論・実証両面からの研究の発展可能性について探ることを目的としています。なお、パネリストに斬り込む役目を太下義之会員、そしてコーディネーターは片山泰輔会員がなさいます。

さて、実行委員会では、東京でのエクスカージョンを用意すべきかどうかも含めて検討してまいりました。

エクスカージョンについては、遠方からご参加の会員の方々に、東京ならではの見所を見ていただこうということで、28日（金）に3つのコースをご用意しております。

一つ目が、東大本郷キャンパス周辺の谷中・千駄木・根津（谷根千という名称で有名）の街を見学するコース（担当：井口典夫会員）。

二つ目が、コンテンツ産業の中心地秋葉原において同人誌販売を手がける「虎の穴」の見学とブリーフィング（担当：増淵敏之会員）。

そして三つ目が、渋谷において民間の東急文化村が新たな劇場「シアターオーブ」を開館させて新たなまちづくりを展開中ですが、そのまちづくりの現場を見学します（なお、シアターオーブは公演中のため見学できません）（担当：草加叔也会員）。

見学の都合上、人数を限定することになるかと思ひ

ますので、どうぞ事前のお申し込みについてご注意ください。

また学会両日ともに、少しお疲れになったときは梅雨の本郷キャンパスをご散策ください。国の重要文化財に指定されている赤門（旧加賀屋敷御守殿門）は有名ですが、今回使用する法文2号館と法文1号館や、すぐ側の正門、安田講堂は国の登録有形文化財に指定されている建物です。最先端で使い勝手の良い施設と対極にあるような古めかしい施設ではありますが、昔の大学というイメージを彷彿させる建物です。

つい先日熊本大会を終えたばかりで、研究発表の報告者が集まるかどうか心配な中でこの原稿を書かせていただいておりますが、どうぞ大勢の方にお集まりいただき、今後の研究の発展のために知的刺激を交流しあいましょう。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

■会場：東京大学本郷キャンパス 法文1号館及び法文2号館（東京都文京区本郷7-3-1）

〔最寄駅〕東京メトロ丸の内線・都営地下鉄大江戸線 本郷三丁目駅、東京メトロ千代田線 根津駅、東京メトロ南北線 東大前駅などより徒歩10分以内  
[http://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/map01\\_02\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/map01_02_j.html)

■日程：下記参照（現時点でのスケジュールですので、時間や内容等に変更の可能性があります）

|          |                                                                                     |                                                                                                                                                                                                                           |
|----------|-------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 6月28日（金） | 午後                                                                                  | <b>エクスカージョン（仮）</b><br>① 東大本郷キャンパス周辺（谷中・千駄木・根津）<br>② 秋葉原におけるコンテンツ産業（「虎の穴」見学等）<br>③ 渋谷におけるまちづくり                                                                                                                             |
| 6月29日（土） | 10:00 - 11:45<br>13:00 - 13:50<br>14:00 - 15:00<br><br>15:10 - 17:40<br><br>18:00 - | <b>分科会 ①</b><br><b>会長講演</b> 清水 裕之氏（文化経済学会＜日本＞会長）<br><b>基調講演</b> 「文化と経済（仮）」<br>中谷 巖氏（三菱UFJリサーチ&コンサルティング 理事長）<br><b>パネルディスカッション</b><br>「文化の現場から～非営利セクターとアーツカウンシルをめぐって」<br>（パネリストは現在交渉中）<br><b>懇親会</b> （於 本郷キャンパス内 カポ・ベリカーノ） |
| 6月30日（日） | 10:00 - 11:45<br>11:50 - 12:30<br>13:30 - 15:50                                     | <b>分科会 ②</b><br><b>文化経済学会＜日本＞総会</b><br><b>分科会 ③</b>                                                                                                                                                                       |

■その他

- ・分科会のプログラムやエクスカージョンの申込み方法などについては、詳細が決まり次第、学会のウェブサイトやメーリングリストなどを通じて連絡いたします。
- ・大会の参加申込み（懇親会を含む）は、5月中旬～6月中旬に、原則としてインターネットを通じて行っていただきます。
- ・大会の発表申込みは、3月13日をもって締め切っております。発表される方には、予稿集の原稿やフルペーパーを提出していただきます。詳細は発表受理のお知らせとともに連絡いたしますが、締切を厳守して下さい。

## 2012 年度文化経済学会〈日本〉熊本大会

### パネルディスカッション報告

#### パネルディスカッション「地方における創造都市戦略の可能性：都市間連携を視野に置いて」

藤原 恵洋

2012 年 11 月 24 日（土）研究大会の地元・幸山政史熊本市長の記念講演「熊本市の都市戦略」を拝聴した後、ただちにパネルディスカッション「地方における創造都市戦略の可能性：都市間連携を視野に置いて」が開催された。

司会進行を藤原恵洋（九州大学）がつとめ、渡部薫（熊本大学）、駄田井正（久留米大学）、藤本広一（福岡市役所）、葉山耕司（紅蘭亭グループ取締役）、岩崎千夏（熊本市現代美術館）、古賀弥生（アートサポートふくおか・活水女子大学）、中村大輔（国際東アジア研究センター・九州大学）の各氏が九州の多彩な現場から創造都市の成果と課題を論じ合った。

冒頭、渡部氏が趣旨説明を兼ね、2012 年 4 月に政令指定都市となった熊本市を対象としながら、東京都に寄り添う横浜市での創造都市展開や、鹿児島県の限界集落再生で知られる「やねだん」（柳谷集落）の独自の取り組みが光る中、中規模の地方都市にとって創造都市は有効か？都市の一部の地域ではなく都市全体が対象となるのか？それによって都市の自己変革や生まれ変わりが果たせるか？真の意味で文化の力で都市は変わるのか？という一群の問題提起がなされた。

これに対し、地元熊本市の都市型フェスティバル Kumamoto Art Street Plex を主催する葉山氏は企業人であり音楽演奏を演じ豊かな熊本市の自然環境を堪能していると独自のライフスタイルを紹介、「都市にベンチャーカルチャーの最前線を創造しよう」と呼びかけた。熊本市都心部の地の利を生かしながら秀逸な展覧会企画や人的交流・情報発信のアートスポットを育む熊本市現代美術館の岩崎氏も「アーティストと行政・市民をここでつなぎたい」と意欲を示した。一方、九州最大の商圏と経済活動を自認する福岡市の企画課長藤本氏は、東京と福岡という対抗軸ではなく、創造都市の魅力を生かし世界都市の中に福岡を位置づけていきたいと最新の都市政策を提示。市民サイドの観点から福岡のアート受容と市民社会の橋渡し役として貢献してきた古賀氏は、長崎の事情にも詳しく、創造都市

を牽引するアートやアーティストと社会の間には適切な媒介者が必要、その人材育成が急務と指摘した。中村氏は鉄都北九州の衰退以降、新たに環境都市としての蘇りながら演劇都市を創出してきた経緯や先達としての海外事情に詳しく、「孤立した創造都市では都市規模の問題にぶつかる、そのために広域連携が必要」と都市間連携のパラダイムを示した。

最後に長年、筑後川流域の上流下流域を一つの都市圏として地域まるごと博物館活動を展開して来た駄田井氏は「流域の中に日本の問題が縮図として現れており、都市の概念を流域に適用しながら魅力創出や活性化を果たして行く必要がある」と示した。

限られた時間での事例紹介と論点の提示であったため十分な議論を生み出すことはできなかったが、きわめて人間的な要素である文化や芸術の創造力を都市づくりに波及させたいと尽力する九州エリアの実践現場を貫く創造意志や事業戦略が共感されあう中、今後の都市間の連携の必要性が十分に示唆されており意義深いパネルディスカッションであった。



## 2012 年度文化経済学会〈日本〉熊本大会

### 分科会に関する座長報告

#### 分科会①-A 映像産業と文化発信

●座長：阪本崇

「映像産業と文化発信」をテーマとする本分科会では、3本の研究報告がなされた。最初におこなわれた梅本克氏の報告は、「アキハバラを、編む」と名付けられた報告者自信の主催するプロジェクトの中間報告という位置づけである。このプロジェクトは、秋葉原が現在抱える問題のなかでも特に深刻な、趣味によるクラスターが個々に孤立しているという点を解決し、趣味文化を介したコミュニティ、あるいはネットワークを形成することで、秋葉原からの新しい消費文化の発信を試みるものである。討論者からは秋葉原が文化のメインストリームのネガとしてとらえられるのではないかという意見が、また、会場からは秋葉原において趣味クラスター間のネットワークを構築することは、そのモザイク的な魅力をかえて失わせるのか、それともそこから新しい何かが生まれるのかとの疑問が示された。

2番目の矢澤利弘氏の報告では、日本全国で行われている数多くの映画祭のうち、比較的成功していると考えられる5つのタイプの異なる映画祭について、会計学の著名な研究者であるキャプランらが提唱した「バランスト・スコアカード (BSC)」の分析枠組みを用いて、そのマネジメントの特徴を明らかにしようとしたものである。インタビュー調査などの結果、これら5つの映画祭ではBSCが提示する「顧客の視点」「内部ビジネス」「革新と学習」「財務」の4つの評価視点からみて良好だけでなく、主催者自信がその実施を楽しんでおり、主催者も「顧客」の一主体として見るべきではないかとの結論が示された。これに対し、討論者や会場からはタイプごとに調査する必要があるのではないか、あるいは主催者は楽しむだけでなく、ミッションを明確にする必要があるのではないかというコメントが出された。

最後の河島伸子氏の報告では、イギリスの映画政策の変遷とその原因を丁寧に追いながら、創造産業政策とナショナル・シネマ促進策との矛盾ともとれる現象が生まれる背景に何があるのかを明らかにしようとする

ものである。報告の中で特に印象的であったのは、イギリスのナショナル・シネマと呼ばれるもののほとんどがハリウッドとの共同製作であり、イギリスの映画製作自体が、実質的にはハリウッド資本を国内に呼び込んで国内の映画関係者の雇用等をまもるかたちになっているということであった。それを表す象徴の一つに支援対象となる「イギリス映画」を決める「文化テスト」がきわめてハードルの低いものになっており、事実上ナショナル・シネマ政策といえないことがあげられた。討論者からは、ナショナル・シネマを支援する根拠は多様性の保持であるが、近年のように海外市場を視野に入れざるをえない状況の下でナショナル・シネマを支援しようとする、国内のマイナーな映画に支援がなされなくなり、かえって国内の多様性を損ねる可能性があることなどが指摘された。

#### 分科会①-B 伝統文化と無形文化遺産政策

●座長：後藤和子

本分科会では、和菓子と都市文化、人形浄瑠璃への市民参加、無形文化遺産政策の課題等について3つの興味深い報告があった。いずれの報告も、文化の本質として極めて重要でありながら計量しにくい「無形の文化」をとりあげた点で注目に値する。

森崎美穂子氏の報告は、「和菓子の需要機会からみる都市文化の多様性について～九州の和菓子の伝統と歴史から～」である。近年、ユネスコの無形文化遺産のなかでも、食文化が注目されている。森崎氏は、長崎のカステラと佐賀の羊羹に着目して、和菓子の消費額および需要機会等のデータ分析により、和菓子産業を育む都市文化の特徴を明らかにしようとした。討論者である藤原恵洋氏からは、森崎氏の一連の和菓子研究を高く評価したコメントがなされた。しかし、本研究は、長崎のカステラ、佐賀の羊羹といった単品をとりあげているにも拘わらず、発表タイトルは「都市文化の多様性」となっており、多様性とは何を意味するのか不明であるという指摘もなされた。

北岡慶子氏の報告は、「伝統芸能における市民参加型

舞台芸術の実演と評価に関する研究～南区人形浄瑠璃「艶競里恋唄」を事例として」であった。討論者である高島知佐子氏からは、本活動は、「多様な市民の参加を実現する実践」という点で社会的意義があり、「伝統芸能の新しい形を模索した実践」という点でも、伝統芸能の後継者育成、鑑賞者開発へと結び付く可能性のある活動である。しかし、本研究で明らかにする成果と課題に対する評価の視点が整理されていないと思われる、というコメントがあった。

角美弥子氏は、「無形文化遺産の保護と活用に関する一考察」というタイトルで報告を行なった。有形文化遺産と比較すると、無形文化遺産の継承にはコミュニティのコミットメントがより深く求められるため、政策によって保護することが難しい。角氏は、国の無形文化遺産政策や島根県の政策と保護及び活用の実態を詳細に調査した上で、問題点と今後の展望について発表を行った。結論として、無形文化遺産と観光との連携が必要である等の指摘がなされた。討論者の関 鎮京氏からは、意欲的な発表であるが、論点が多岐にわたり結論として主張すべきことが整理しきれていないのではないかな等の指摘があった。同じ島根県でも多様な事例があるように、国と県の政策のみでは、無形文化遺産の観光への活用や知名度の違いを説明するのは難しいと思われる。日本では、世界遺産に登録されても観光客は持続的には増えない等の悩みを抱える自治体も多い。文化遺産の保護と活用のあり方をめぐって、今後より深い分析が望まれるところである。

いずれの発表も無形の文化遺産に関わる興味深いテーマに挑戦した意欲的な研究成果であり、今後の研究の発展が期待される。

## 分科会①-C 文化の計量分析

### ●座長：勝浦正樹

本分科会では、有馬昌宏氏による「学生の実演芸術鑑賞の現状と20年間の変化」、作間逸雄氏による「貴重品概念の検討」という2件の報告（1件の報告がキャンセル）があり、討論者は、それぞれ清水裕之氏、八木匡氏であった。

まず有馬氏の報告では、報告者が属する研究グループが実施してきた「学生の芸術意識と芸術活動に関する調査」（以下、「学生調査」）の第5回調査（2008年）のデー

タがほぼ利用可能になったことから、第1回調査（1985年）から約20年間の時系列変化を追うことができるようになったと説明がなされ、主に実演芸術のライブでの鑑賞率の推移や地域による違いなどが示された。また、総務省統計局「社会生活基本調査」の結果の中で比較可能なデータを用いて、学生調査の結果の妥当性についても検証され、さらに学生調査のデータの集計・分析方法の発展性や問題点などについても言及された。我が国では芸術の振興が叫ばれているものの、それを評価するための詳細にジャンル分けされた芸術鑑賞に関する客観的なデータがない中で、調査対象が大学生に限られているとはいえ、時系列的な推移も追うことができるこうした調査は、非常に貴重なものであることは間違いないだろう。

これに対して討論者からは、文化経済学にとって重要な調査を長期にわたって継続的に実施してきたことに対して敬意が払われた上で、大学生を調査対象とした結果のもつ意義、鑑賞率に関する実感とのズレとその理由、地域差の分析とマーケティングの関係などについてコメントがなされた。さらにフロアからは、ライブとメディアによる芸術鑑賞の代替性と補完性は大学生と社会人では異なるのではないかな、時系列的に変動要因を分析するにはどのような方法が考えられるかなどの質問がなされた。

次の作間氏の報告は、SNA（System of National Accounts；国民経済計算）における貴重品の概念や取扱について、1993年に改訂されたSNA（93SNA）ではどのような問題が存在するのかを指摘した上で、それをどのように扱うことが望ましいのかにまで踏み込んだものであった。すなわち、93SNA以降において貴重品を資本形成概念に含めることに対して批判的な検討が行われ、貴重品のうち美術品、骨董品、歴史的建造物に対して「有形文化財」という新たなカテゴリーを構成することが提案されている。こうした提案は、報告者の美術館に対するヒアリング調査などが基礎となっているが、それを実現させるためには、美術館・博物館の収蔵品に対する包括的調査が必要となり、こうしたデータが得られれば文化経済学にとっても非常に貴重な情報となるに違いない。

討論者からは、報告者の貴重品に関する提案のメリッ

ト・デメリットを明示すると理解しやすいといった指摘がなされた上で、美術館・博物館の収蔵品の生産財としての位置づけ、美術館・博物館による生産の GDP における取扱いと貴重品概念の関係などについてのコメントがなされた。さらにフロアからは、貴重品の種類によってどのカテゴリーに含めるのが SNA の概念上望ましいのか、などについての質問がなされた。

文化の計量分析というセッションであったが、有馬氏の報告が大学生に対するアンケート調査の計量分析、作間氏の報告が計量分析の基礎となる SNA 統計に関する理論的な検討と対照的なテーマであり、2 件の報告であったものの興味深く有益な分科会であった。

#### 分科会①-D

#### クリエイティブ集積とネットワーク

●座長：佐々木雅幸

本分科会は 4 人の発表者を迎え、それぞれの指定討論者が討論を行った後に、フロアからの討論も受け付けた。最初の発表者、馬 麗娜氏は「リノベーションを通して創出されたクリエイティブクラスターの評価と課題～福岡の 3 つの事例を対象に～」というタイトルで、近年、福岡市内で注目される 3 つの事例（博多区の「冷泉荘」、天神大名の「紺屋 2023」、平尾の FUCA）を取り上げ、いずれも古いアパートや倉庫を「創造空間」にリノベートし、クリエイターらが集積してクリエイティブクラスターの形成に向かっていていると指摘し、その持続的発展が課題となっていると述べた。

続いて、大前 研二氏は「学生演劇祭による美濃加茂市の芸術文化振興」と題して、現在進行中の文化事業の企画に携わっている経験をもとに、課題を指摘した。対象となる美濃加茂市は約 1600 名の従業員を擁するソニーの子会社が 2012 年末にも撤退するという衝撃の中で、新たに「学生演劇祭」を継続的な事業として立ち上げるうえで、内外の連携とコミュニティの成長を重視することを提案している。

第 3 の発表者である富本 真理子氏は「まちかど博物館ネットワーク化の意義と展望—三重県まちかど博物館を事例として—」において、独自の発展をしてきた三重県におけるまちかど博物館の発展経緯と概要について、丹念なヒアリング調査に基づいて明らかに

し、博物館的機能、まちづくり機能、ネットワーク機能があることを指摘し、その意義として、県による制度化を活用するすべを住民が学んだこと、フランス発のエコミューゼの影響があることも指摘している。

最後の発表者である野田 邦弘氏は「過疎地における創造的人材集積の成功要因分析試論」として、海士町（島根県隠岐）、神山町（徳島県）、そして、米国のサンタフェの事例を取り上げて創造的人材の選択的誘致という質的な視点と、そのような人材を地域に吸引する要因の分析を行った。これらの地域の成功要因として、①豊かな自然、②クリエイティブな活動を誘発する制度や雰囲気、③キーパーソンの存在、④クリエイティブ人材のネットワークの存在、⑤よそ者に寛容な土壌を指摘し、R. フロリダの仮説が過疎地にも有効であると述べた。討論では「創造的過疎」論や、「創造農村」論などの新たな概念の検討が課題として挙げた。

以上、本分科会では、近年注目される「クリエイティブ集積とネットワーク」の動向が都市のみならず、農村や過疎地においても見いだされること、また、日本再生にとっても大きな課題になっていることが示されたように思われる。

#### 分科会②-A

#### まちづくりと文化経済

●座長：小野田泰明

従来、コミュニティにその関心の重点が置かれていた「まちづくり」であるが、近年は、活動を持続可能なものとする血液として、まちづくり会社などの経済的側面にも注目が集まっている。そういう意味において、まちづくりと文化経済の関係を問うた本セッションは、時期を得たものであり、4 人の発表者により興味深い報告が行われた。討論者は、古賀弥生、川井田祥子であった。状況がまだ萌芽的であるために、試行的な内容とならざるを得ない側面もあったが、文化経済の可能性を指し示すものが多く、コメンテーターと発表者、そして会場の議論は活発であった。

砂田和道による「わが国の学校教育における芸術体験事業としてのオーケストラプログラムの今日的課題の考察」は、日米英の学校教育におけるオーケストラ活動の比較から日本の課題を浮かび上がらせたもので、資料

の価値の高い労作であった。事前に専門家が各学校を訪問してプログラムに反映させ実公演をホールで行う英米と、楽曲・楽器解説中心で、体育館という音響的に劣悪な環境下で実施されている日本との差には、あらためて慄然とした。

岩井千華による「第三の場所としての図書館の可能性についての一考察」は、自らの体験を踏まえながらサードプレイスとしての図書館の可能性を提示したものである。居場所としての図書館という概念は、我々建築関係者には、なじみの深いものであるが、一般化されることは少なからず意義の深いものであったと思う。残念なことに、各概念の定義があいまいで今一つ論理が明瞭ではなかったが、川井田の切れ味のある寸評がそのあたりを補完し、全体として引き締まった討論となった。

佐藤忠文による「千年都市菊池における市民主体のまちづくり中間支援「菊池養生詩塾」の創出と活動展開」、藤原恵洋による「まちづくりの契機としての文脈・矜持・紐帯の再生がもたらす補完性と創発性の検討」は、熊本県菊池市における市民主体のまちづくりの展開が、まちの参加者と支援する学識の両面から描かれたもので、聞きごたえがあった。地方都市の活性化は日本全体が直面している課題だが、佐藤、藤原の報告からは、効率的にそれを実現する方法などなく、地域資源の掘り起こしに真摯に取り組む地元のマンパワーと、構造化を担う学識の地域に対する深い愛情と執着なくして、それらは実現し得ないという迫力が伝わってきた。強いて言えば、彼らの活動によって増えているのは、パットナムによる社会関係資本に近い概念のように思うが、菊池市のそれは具体的にどのような要素から構成されているのかを知りたい所ではあったが、残念ながら時間切れとなった。これらは、災害に対する地域のレジリエンスとも関係する重要な概念でもあり、今後に期待したい。

## 分科会②-B

### 文化イノベーションと大学の役割

●座長：清水裕之

近年、大学と地域の連携が大きな流れとして各地で展開されている。特にまちづくりと文化芸術活動の地域における出会いについては、その関係性の構築が大きな流

れになっているとあってよい。それは、一つは、大学評価の観点から、大学の存在意義としての地域貢献が重視されるようになり、それぞれの大学が、各部局における地域との関係づくりを積極的に後押ししていることがある。まちづくりに取り組むと、すぐに気付くことであるが、地域活性化や地域福祉の増進に最初の視点があっても、結局は、その地域の人々の生活に深く入ってゆくには文化を理解せざるを得ず、その地域の文化のありようには否応なく向かい合うことになる。また、それと少し異なる文脈ではあるが、文化芸術分野は、文化芸術振興基本法や劇場・音楽堂等活性化法などの整備が進む中で、文化芸術環境を整えるための高等教育機関の役割が重要視されるようになっている。このような背景で、大学が地域の文化や芸術とアカデミズムの垣根を越えて取り組むようになっていることは大いに評価したい。

本セッションで報告された4本の事例報告・研究についても、それぞれ特徴的で具体的な活動内容が示され、興味ある討論が展開された。それを一つ一つ紹介する紙面はないが、いくつかの課題が浮かび上がった。

それは大学がどのようなミッションを持ち、どのような役割を担い、どのように参加するのか、連携の相手は誰か、連携のリーダーシップは誰がとるのか、どの程度継続的に、かつ深く関係性を構築できるのか、地域に最終的に何がもたらされるのかという点である。10年ほど前までの大学と地域の連携は、組織を介した連携というよりは、一人の教員、そしてその学生と地域の行政、あるいは商店街、自治会などの自治組織との関連性が強く、大学がその活動を組織的に支援するようなことは少なかった。これに対し、近年の連携は大学、あるいは部局として積極的に認知しようとする傾向があるように思う。

しかし、そうなると、組織と組織との間の協力関係に、より強いミッションの設定や、その達成の確実性、組織としての責任の在り方などがより強く問われることになる。また、大学は研究機関であり、ある程度地域と関わり、事例分析が進むと、その対象に対するモチベーションが下がってくることも否めない事実である。反対に、地域は、最終的に、大学が地域に何をしてくれたのか、その成果を強く求めるようになる。プロジェクトが成熟すればするほど、このことが地域と大学との意識のギャップ



になる恐れがある。

本セッションの報告には、まだ、始まったばかりの小さなプロジェクトから、都市の在り方を大きく変えるような深い重みのあるプロジェクトまであり、それぞれのレベルでの地域と大学との関係性の程度、問題のありようは大きく異なっているように思えた。興味のある方は、それぞれの報告を横断的に比較してみるとよいだろう。

## 分科会②-C

### 非日常空間と アートプロジェクト

#### ●座長：中谷武雄

本セッションの報告者（所属）とタイトルは以下である（以下敬称略）。

#### 1. 田中尚人（熊本大学政策創造研究教育センター）

「フランス・ロリアンにおけるヴァカンスの日常性」

ヴァカンスは、フランスでは地域の歴史と景観や自然に即して楽しむ文化活動と理解され、生活のなかに溶け込んでいる。地域をエコミュゼとして享受しながら、歩く、食べる、語る、を楽しむヴァカンスは、日常的な体験の場として生活に位置づけられている。

#### 2. 藤原旅人（九州大学大学院総合新領域学府 M2）

「地域型アートプロジェクトにおける若者の学びの場としての可能性」

地域社会とアートの橋渡しをする若者のボランティアに聞き取り調査を行い、彼らが生きがいの場、機会として位置づけていることから、アートが誘発するコミュニケーションとコミュニティの再生に向けての展望を探ることができる。

#### 3. 國盛麻衣佳（九州大学大学院芸術工学府 D3）

「旧産炭地における炭鉱を文化資源としたアートプロジェクト 石炭・石炭灰顔料 COAL PAINT を用いたアートプロジェクト実践による旧産炭地住民の矜持再生」

炭鉱は衰退産業の象徴であり、旧産炭地の「負の遺産」であるが、石炭、石炭灰と赤ズリを原料とする顔料で炭鉱生活を描くことから始まり、画題対象が広がり、参加者が増え、地域社会が活性化し、住民の矜持が甦りつつある。

#### 4. 谷口文保（神戸芸術工科大学）

「芸術創造と公共政策の共創を誘発するアートプロジェクト」

アートプロジェクトは、住民参加と共同制作と領域

横断によって創出される表現と交流が循環し、共創表現、地域再編、共生作用を生み出されることにより公共性を発揮し、公共政策の中に組み込むことができる。

討論者は、1、2 が勝浦正樹（名城大学経済学部）、3、4 が有馬昌宏（兵庫県立大学大学院応用情報科学研究科）であった。地域の再生や参加者の活性化など、プロジェクトの成果を評価する場合、比較の基準の明確化、客観性の説明、他事例との比較をふまえた上での特徴の指摘の必要性など、説得力を増すうえでの工夫が要請された。

アートプロジェクトの本質、人間性・個人と地域性・公共性、日常性と非日常性、休息・教育と創造・模倣など、今後文化と経済を考えていくうえで面白い論点が浮かび上がった。

それぞれの報告とともにコメントにもパワーポイントが準備され、充実した分科会であった。報告、討論とも時間超過気味で、終了も予定時間を超えてしまった。運営の不手際をお詫びします。

## 分科会②-D

### コンテンツ・クリエイティブ 産業の分析

#### ●座長：八木匡

本セッションの第1報告は、稲熊太郎氏による「日本におけるコンテンツ産業政策の現状と課題」であり、コンテンツ産業の人材育成のための政策の有効性について、アニメ産業を例にとりながら分析したものであり、重要な課題を扱ったものである。討論者である後藤和子氏との議論の中で、コンテンツ産業におけるキャリア形成のメカニズムを詳細に明らかにし、アーティストとクリエイターとの違いを考慮した人材育成プログラムの策定が必要であることが指摘された。

第2報告は、廖偉汝氏による「台湾における文化創意産業と文化創意園區の形成過程と実態に関する研究—「華山文化創意園區」を事例として—」であり、コンテンツクラスターの問題点を明確に指摘している報告であった。討論者の後藤和子氏との議論の中で、コンテンツ産業の集積のメカニズムを考察する上で、創造プロセスと商業活動との地域的分離が、どのようなメリットとデメリットを有しているかが問題として浮かび上がった。消費者とクリエイターとの共創作業が、産業集積のデザインのあり方によって、異なるものになることが予想され、重要な問題提起であると理解している。

第3報告は、牧和生氏による「コンテンツ・ツーリズムから見る文化と心理のあり方」であり、ツーリズム需要に関する心理的側面に着目した挑戦的な研究であった。河島伸子氏との議論の中で、ツーリストの心理的特性として、コンテンツに対する新鮮なるサプライズがなければツーリズムに対する需要も発生せず、需要喚起のためには心理的分析が必要であることが指摘された。

第4報告は、杉浦幹男氏による「沖縄県における文化の産業化の取り組み～コンテンツファンドによる資金的支援と組織化、その課題～」は、コンテンツ制作に対す

るファンドによる支援の実態と課題を明らかにした報告であり、示唆に富んだものであった。特に、討論者の河島伸子氏との間で議論された、投資先を決定した後の事業の管理とアドバイスといった、投資収益率を高めると共に、制作されるコンテンツの質を高めるための仕組み作りが重要であることが明らかになった。

全般を通して、コンテンツ産業の構造と事業として成功するためのプロセスを考える上で示唆に富むセッションであったと理解している。このような構造の理解の上で、政策の策定が進められることが重要であると考えられる。

## 2012 年度文化経済学会〈日本〉 総会

### 特別講演報告

総会特別講演：東日本大震災、復興事業の今日的課題と文化経済学の対象としての可能性

小野田 泰明

#### はじめに

発災から二年。被災自治体では復興計画が策定され、防潮堤、防災集団移転、復興公営住宅の工事が始まっている。しかしその一方で、津波で押し流されてしまった多くの場所では、今も広漠とした風景が広がっている。本稿では、これら復興の状況を整理しながら、そこにおける文化経済的な課題について考えてみたい。

#### 復興の前提

中央防災会議では、数十年に一回の津波（L1）を水際の防潮堤で守った上で、数百年に一度の津波（L2）は逃げるとしているが、住民の感情に向き合わなければならない被災自治体の多くは、津波シミュレーションにおいてL2で2m以上の浸水が想定される場所には居住を認めていない。それゆえ、小さな漁村であっても、L1対応の防潮堤を設けた上にL2で浸水しない高台移転をするという、重装備な復興計画が動いている。また、防潮堤などの維持にはコストが掛かるために、その整備に当たっては費用対効果の算定が求められるはずであるが、それが実際に適用されることは極めて少ない。

多重防御とはいえ結果的にハードが中心の構成となっているこうした日本のやり方に対して、欧州では

ハードのみならず、土地利用と保険というソフトウェアが整備されており、国民の財産は多層的に保護されている。英国ではPPS(Planning Policy Statement)、フランスではPPR(Plan de prévention des risques naturels prévisibles)と呼ばれており、ともに浸水の危険性を判定した土地利用マップを政府が自治体と協力して設定し、危険エリアに建設された建築物には、防災保険の支払いを限定している。これらは河川の氾濫を想定しているため、津波に比べてリスクを予測しやすいという違いはあるが、保険によって低頻度災害をヘッジしようとするのは、それなりに理にかなっている。日本でもこうした議論が広範に起こるべきだと考えているが、どういうわけか「絆」ばかりが強調され、リスクに対する社会の構造的な対応は、等閑視されたままという奇妙な状況にある。

#### 被災のタイプ

こうした前提は、重要ではあるがその構築に時間がかかるため、復興の現場では現状で出来ることを総動員して復興するという事になっている。被災地は通常、地理的・社会的・経済的な条件が異なるため、復興の実態も多様だが、乱暴にくくと下のよう整理

できる。

①低地かさ上げ中心型（女川町、大槌町、陸前高田市の中心街）

津波を受けた低平地を数メートルかさ上げして業務地区や住宅をその上に再生する型。中心市街が壊滅した街で採用されることが多く、大規模区画整理など大型事業が展開される。

②現地建て替え中心型（石巻市や釜石市の中心街）

防潮堤などを強化した上で、ほとんど盛土せずに現地で再生する型。市街地機能が残存し、L2津波にもその被害をある程度抑え込むことが出来る地域で採用される。

③高台移転中心型（リアス式海岸の湾奥の集落）

想定津波高さが高く低平地をかさ上げしても間に合わないため、全体で高台に移転する型。

④内陸移転中心型（仙台市、岩沼市、山元町）

完全に内陸移転するタイプ。周辺に高台がなく、盛土にも限界がある平野部で採用される。

## 復興の課題

これらは先に挙げた国の復興の枠組みに即して、妥当と考えられる方向性が選ばれた結果でもあるが、これら公的な復興事業が完了した後、実際に活力のある地域の再生がされるかどうかは、また別問題である。例えば、公共事業として丁寧な対応をしている①かさ上げ中心型は、その広大な地盤に、民間の活動が戻るかには大きな不安があるし、発災前から人口減・高齢化に苦しんできた地域の多い③高台移転中心型は、そこへのアクセスや低平地との連携などが課題で、集落としての持続可能性には懸念も多い。

また、再生する上での歴史的断絶も大きな問題である。発災直後、被災地域には半壊状態の古い蔵などが多数残されていたが、撤去に公費が出る期限が設定されてしまったために、十分な検討なしに、あっという間に取り壊されてしまった。

復興では、居住意向調査を実施し、それを前提に高台移転計画などが策定される。しかし、復興の十分な情報を与えられずに住民が答えた結果には、広域での再生可能性や長期的な視点が欠如している場合もあり、分散し不便な高台が増える結果ともなっている。難しいのは、これらはれっきとした民意であり、そのまま事業化することが善とされてしまいがちであるという

点である。復興公営住宅についても、似たような状況が生まれている。不確定な情報をもとに収集した意向に基づいて、整備数が多めに定められ、ニーズが減った後の出口戦略についての議論が十分なされることは少ない。

## 復興計画の善循環とその要因

そのような中、復興を比較的うまくマネジメント出来ている自治体の一つに、宮城県七ヶ浜町がある。例えば、被災自治体は通常、不完全な情報提供は避けたい一方で、情報が確定するのを待っていては対応が後手に回ってしまうというジレンマを抱えているが、5kmの直径の円の中に町域がすっぽりと入るこの町では、その名（七ヶ浜）が示す通り、7エリアが自律的に連携するコミュニティが存在しており、これらを活用して、不確定という条件付きながら、早くに情報提供を行っている。それをもとにした住民が判断した結果は、公営住宅数などが抑制された相対的に妥当なものであり、復興エリアの丁寧なデザイン（高台、復興住宅）が、それによって可能となっている。こうした復興計画実施の善循環が、どのような要素によって成立しているのか、また、そこには、文化資源がどのように関与しているのか（七ヶ浜は子供向け創作ミュージカルで有名な自治体である）。実務に携わりながらも学問的な興味は尽きない。

## 参考文献

小野田泰明、建築論欄：ホワイトナイトかゲリラか - 震災復興建築家には何が出来なのか、新建築、12、pp. 43-48、2012

吉田恭、古本一司、馬場美智子、防災に関する土地利用と社会システムに関する研究、国土交通政策研究所報、30、pp. 32-53、2008

本報告は、2012年9月29日に埼玉大学東京ステーションカレッジで開かれた2012年度総会における特別講演の概要を、本誌のために特別に書き下ろしていたものです。

## 第2回国際文化経済学会アジアワークショップ (2013年9月17日～19日)のご案内

後藤 和子 (国際担当理事)

第2回国際文化経済学会アジアワークショップを以下の通り開催します。

**日時** 2013年9月17日(火)～19日(木)

**場所** 高松市及び直島

2011年秋のアジアワークショップに続き、今年9月に、第2回国際文化経済学会アジアワークショップを開催します。2013年には、直島や豊島、小豆島、犬島等を会場とした第2回瀬戸内国際芸術祭が、春、夏、秋の3期にわたり開催されます。アジアワークショップはその合間を縫って開催しますが、ワークショップで文化経済学に関して議論を深めるとともに、芸術祭関連の多くの作品も鑑賞することができますと思います。

17日夕方から19日午前にかけて、D. スロスビー教授とA. クラマー教授をワークショップリーダーとしてワークショップを行い、19日午後には直島を会場として、植田和弘京都大学教授に、瀬戸内海的环境再生や地域再生とアートについて、福武財団には、直島をはじめとする瀬戸内海再生の実践についてのご講演をお聞きするシンポジウムを開催します。

ワークショップならびに発表の申込みの詳細は、学会ホームページ (<http://www.jace.gr.jp/>) にあるアジアワークショップのCall for Papersをご覧ください。発表を希望する方は、簡単な履歴書とA4で1ページ程度のアブストラクト(英文)をg018jace-asia.ws@ml.gakkai.ne.jp宛てに、5月15日までにお送りください。

ワークショップのため、多くの海外研究者と身近に議論できます。今回は、若手研究者に限定せずに、優れた研究や研究の構想を募集しています。また、発表はしなくてもワークショップに参加して発表や議論を聞きたいという方は、オブザーバーとして参加できます(オブザーバー参加を希望される方は、上記のアドレスにご連絡ください)。是非、多くの会員の方にご参加いただきたいと思います。なお、このワークショップに関して、国際交流基金に助成を申請中です。

2013年  
11月3日  
(日)

2013年度秋の講演会は、北海道札幌市の北海道大学で開催されます

## 2013年度秋の講演会(北海道) 開催日程等のご案内

今年の「秋の講演会」を札幌で開催いたします。2008年度の「研究大会」から5年ぶりの札幌開催となります。

テーマは、劇場やミュージアムなどの文化施設を訪れない人びとや、これらに関心を示さない人びとが共感する価値の創造とは何かです。詳細につきましては、次号ニューズレターなどでお知らせいたします。ご期待ください。

なお、エクスカッションとして、毎年恒例の「さっぽろアートステージ」をお楽しみいただける予定です(昨年のHP <http://www.s-artstage.com/2012/>)。

**日程** : 2013年11月3日(日曜日・文化の日/翌4日は振替休日)の午後

**会場(予定)** : シンポジウム 北海道大学(札幌市北区北8西5)

懇親会 札幌市内会場



## 学会誌「文化経済学」編集委員会より

### 1. 論文の投稿について

「文化経済学」は、年2回発行され、年2回の区切りで投稿論文を受け付けています。

|    |         | 第11巻第1号<br>(通巻第36号) | 第11巻第2号<br>(通巻第37号) |
|----|---------|---------------------|---------------------|
| 締切 | 論文エントリー | 2013年7月末            | 2014年1月末            |
|    | 論文提出    | 2013年9月末            | 2014年3月末            |

### <応募・掲載条件>

論文の応募(エントリー)は本学会員に限られます。学会費が未納の方は論文のエントリーをすることはできません。掲載には、査読委員の審査を経て掲載が妥当と認められること、掲載料をお支払いいただくことが条件となっています。(2ページ毎に6,000円、ただし、50部の抜き刷りを配布いたします)

### <応募方法>

FAX、email、郵送のいずれかで、下記7点を事務局(本誌末の連絡先)までお送り下さい。

①応募日付 ②応募者名 ③会員番号 ④所属 ⑤タイトル ⑥論文要旨(400字程度) ⑦応募者連絡先

### <応募にあたっての留意事項>

- ・過去の研究への言及と、従来の研究の流れの中での自己の研究の位置づけ、または独自性が明確になっていること。
- ・論証や実証に必要な文献・資料の参照が行われていること。
- ・歴史的事実等については、事実が正確であるかどうかの確認を行っていること。
- ・応募する論文は未公表のものであること。また、他の学術誌等への投稿の予定がないものに限る。
- ・英文要旨については必ずネイティブ・チェックを受けること。
- ・提出先・提出方法・原稿の形式などの詳細は、文化経済学会のウェブサイトを必ず参照のこと。

<http://jace.gakkai.ne.jp/bosyu.html>

### 2. 学会誌における書評について

学会誌の書評で取り上げて欲しい本がありましたら、メールにて書名をお知らせください(宛先: ktomooka@tcue.ac.jp)。また、書評のための献本をしていただける場合は、友岡邦之編集長まで送付をお願いいたします(宛先: 〒370-0801 高崎市上並榎町1300 高崎経済大学地域政策学部 友岡邦之宛。なお、事務局宛の献本は受け付けておりませんので、ご注意ください)。その後編集委員会で検討し、取り上げるべき本と判断されれば、評者を選定の上、学会誌に書評を掲載します。

## 理事会報告

### 文化経済学会<日本>第XI期第2回理事会

日時: 2012年11月25日(日) 12:00～12:50

場所: 熊本大学黒髪北地区内 文学部・法学部棟2階共用会議室

出席者: 清水会長、河島副会長、勝浦理事長、有馬、太下、小野田、川井田、後藤、佐々木(雅)、友岡、中谷、野田、藤原、八木、事務局1名

委任状提出者: 17名

欠席: 2名、1団体

### <第1号議案> 会員の入退会について

入会希望者3名の入会が確認され(持ち回り理事会ですでに承認)、退会希望者3名の退会が承認された。

### <第2号議案> 2013年度研究大会(東京)について

太下理事より、資料に基づき、2013年6月29日～30日に開催される東京大学における研究大会の準備状況が報告され、6月28日にエクスカージョンを実施することやシンポジウムのテーマ・内容などについて説

明がなされた。それに対して出された意見を踏まえ、引き続き実行委員会を中心に検討されることになった。

#### 〈第3号議案〉 2013年度秋の講演会について

勝浦理事長より、資料に基づき、2013年秋の講演会の担当理事を佐々木亨理事が引き受けて下さったので、札幌（北海道大学）で行いたい旨の報告があり、承認された。開催時期を含めテーマや懇親会会場については、引き続き検討されることになった。

#### 〈第4号議案〉 今後の理事会体制について

##### (1) 担当理事

勝浦理事長より、資料に基づき、第XI期の理事会体制について、学会誌担当として編集主幹の新藤浩伸氏、ウェブサイト担当として学会三役と澤村明氏が、前回の理事会以降追加され、承認された。

##### (2) 理事会の交通費支給

勝浦理事長より、資料に基づき、理事会の交通費支給ルールについて説明がなされ、確認された。

##### (3) 「学会の将来展開と活動活性化のための検討ワーキンググループ」について

清水会長より、資料に基づき、今後の学会のあり方等について提言をするための組織（「学会の将来展開と活動活性化のための検討ワーキンググループ（以下WG）」）を立ち上げたいとの提案があり、WGの役割や活動スケジュールについて説明がなされた上で、承認された。

また清水会長より、WGの委員長を八木理事にお願いしたいとの提案があり、承認された。さらにWGを構成するメンバーの候補が提案され、近日中に依頼し、依頼を承諾した方を委員として委嘱した上でWGを正式に組織し、活動を開始することが承認された。

#### 〈第5号議案〉 2014年度の研究大会・秋の講演会について

勝浦理事長より、資料に基づき、本件については10月末に発行されたニューズレターで募集したものの応募がなかったことが報告された。

#### 〈第6号議案〉 国際関係の企画について

河島副会長より、資料に基づき、国際文化経済学会京都大会を含めた20周年記念事業の寄付金の最終的な金額等の結果が説明された。

後藤理事より、アジア・ワークショップを文化経済学会〈日本〉の主催で、2013年9月に直島・高松で開催することが提案され、承認された。なおこの事業については、国際交流基金に助成金の申請を行うことも

あわせて報告された。

#### 〈第7号議案〉 その他

勝浦理事長より、今後ニューズレターの巻頭言等は非学会員にも執筆を依頼し、その場合は謝礼を支払うこと、また配信については刊行当初から学会ウェブサイトにもアップロードし、公開することが提案され、承認された。

同じく勝浦理事長より、会員名簿をオンライン化したいとの提案がなされた。システムや費用などを確認した上で、今後さらに検討されることになった。

次回の理事会は東京大学で2013年1月13日に開催することとなった。

## 文化経済学会<日本>第XI期第3回理事会

日時：2013年1月13日（日）14：00－16：00

場所：東京大学本郷キャンパス法文1号館1階115教室

出席者：清水会長、河島副会長、勝浦理事長、井口、伊藤、  
片山、後藤、小林、佐々木（晃）、友岡、中谷、増淵、  
曾田、事務局1名

委任状提出者：20名

欠席者：1団体

### 〈第1号議案〉会員の入退会について

入会希望者1名に関しては、入会が了承された。退会希望者4名に関しては、3名の退会を了承し、1名については慰留することとした（ただし、退会者1名については後日、退会撤回の申し出あり）。また会費を3年間滞納した会員には事務局から督促を行い、会費滞納を4年以上経たした会員には、2013年3月中に会費振込みまたは退会届の提出がない場合は、滞納退会処理を行うこととした。

### 〈第2号議案〉2012年度研究大会（熊本）報告

勝浦理事長から、2012年11月に開催された研究大会について、84名の参加があり、会計面でも熊本大学等からの助成もあって問題なく終了した旨の報告があった。

### 〈第3号議案〉2013年度研究大会（東京）について

勝浦理事長から、資料に基づき、2013年6月29日・30日に東京大学本郷キャンパスで開催される研究大会について、発表申込み2月4日～3月13日、予稿集・フルペーパー提出4月1日～5月24日、参加申込み5月中旬～6月中旬等のスケジュールに関する提案がなされ、了承された。次に研究大会担当の小林理事から、資料に基づいて現時点での研究大会の準備状況について、基調講演やシンポジウムの内容を中心に報告があった。

### 〈第4号議案〉2013年度秋の講演会について

勝浦理事長から、秋の講演会担当の佐々木（享）理事が作成した資料に基づき、2013年11月3日に開催するなどの報告があった。

### 〈第5号議案〉2014年度研究大会・秋の講演会について

勝浦理事長から、上記の開催地については、現在調整中という報告がなされた。

### 〈第6号議案〉国際関係（アジアワークショップ）について

勝浦理事長から、2013年9月17日～21日にアジアワークショップを高松・直島で開催する予定であり、この事業について2012年12月初旬に国際交流基金の助成を申請したことが報告された。国際担当の後藤理事から、ワークショップリーダーに招聘する研究者の紹介等がなされた。

### 〈第7号議案〉学会の将来展開と活動活性化のための検討ワーキンググループの委員の構成

勝浦理事長から、上記ワーキンググループの委員について、資料に基づき報告があり、了承された。

### 〈第8号議案〉学会名簿の電子化について

勝浦理事長から、2013年度の会費請求時に合わせ、会員の個人情報の開示の許諾を受けた上で、学会名簿を電子化したいとの提案がなされた。審議の結果、費用や機能などを確認した上で、再提案することになった。

### 〈第9号議案〉役員選挙細則の改正について

勝浦理事長から、個人会員理事の人数の変更のための役員選挙細則の改正について提案がなされた。審議の結果、三役で再度検討した上で、次回の役員選挙に間に合うように継続して議論することとなった。

### 〈第10号議案〉学会のウェブサイトのリニューアルについて

勝浦理事長から学会のウェブサイトのリニューアルを行うに際し、理事会メーリングリストで問題点の指摘や要望を募りたいとの報告がなされた。

### 〈第11号議案〉その他

世界劇場会議「国際フォーラム2013」への後援の依頼があり、これを了承した。また次回の理事会は3月29日17時から東京大学で開催することとなった。

## 入退会情報（敬称略）

●第XI期第2回理事会（2012. 11. 25）にて承認

### 入会

なし

### 退会

3名

●第XI期第3回理事会（2013. 1. 13）にて承認

### 入会

土屋正臣（東京大学大学院）

### 退会

3名（ただし、1名は後日、退会撤回の申し出あり）

●理事による書面審査にて承認（2013. 1. 31）

### 入会

林宰寛（名古屋大学大学院）

●理事による書面審査にて承認（2013. 2. 28）

### 入会

境新一（成城大学）／大島絹衣（成城大学大学院）

## 《支部活動報告》 関東支部活動報告

関東支部が2013年2月13日（水）に行った研究会についてご報告させていただきます。会場は法政大学新見附校舎A501教室で、12名の皆様にご参加いただきました。ご報告は法政大学大学院政策創造研究科 教授の増淵敏之さんです。ご報告のテーマは「コンテンツツーリズムと横須賀」で19時から20時30分まで研究会が行われました。

増淵さんは著作『物語を旅するひとびと』でも取り上げていらっしゃるように、コンテンツツーリズムを精力的にご研究されております。近年、コンテンツツーリズムに対する注目は高まっており卒業論文や修士論文などのテーマにも多く選ばれています。企業や地方自治体だけでなく、学際的にも過熱するコンテンツツーリズムについて、増淵さんはコンテンツツーリズムにおける研究対象がアニメ作品に傾倒していることを指摘されました。増淵さんの今回のご報告にはアニメ作品ももちろん含まれておりました。しかし、今回のご報告で取り上げた横須賀やその周辺の町には、アニメだけではなく映画、ハードボイルドミステリー、音楽（歌詞）などの中にも

コンテンツツーリズムへのヒントがあることを述べられました。メディアなども「アニメ＝コンテンツツーリズム」という認識のもとで現象を捉えることが多いように思われます。しかし、増淵さんは別の角度からコンテンツツーリズムにアプローチをされており、横須賀という町がコンテンツを通じての物語性の付加がどのような影響を与えるのかなど、大変刺激的なご報告でした。

また、アニメ作品におけるコンテンツツーリズムに関しては、仕組みの構築などの難しさについても増淵さんにご報告されました。これは他の研究者も指摘する部分なのですが、アニメにおいてはこだわりの強いファンの存在や、ツーリズムの舞台となる町などがツーリズムの楽しみ方を固定してしまうと面白さが無くなるという点、一方である程度のルールを作らないと間違った方向へとツーリズムが向ってしまうという点などが挙げられます。しかし、増淵さんはアニメ作品のファンが作品を通じてその地域の魅力を発見するだけではなく、作品の舞台となった地域の住民も作品を通じて、自らの町の魅力に気が付くきっかけとするべきであると述べられました。しかし、過熱するコンテンツツーリズムにおいては作品を単に利用するだけの企画も登場します。そのようなコンテンツ利用では数年後にその作品は忘れ去られてしまうことになります。やはり、ファンが長期的に作品



を愛し、舞台となった町を愛してもらう仕組みづくりが重要になりそうです。

コンテンツツーリズムでは地域住民とファンとの交流に可能性を見出している研究者もおります。コンテンツツーリズムをきっかけとしてこれまで出会うことのなかったひとびとが出会うことは、予期せぬ可能性を生み出すこともあるのです。増淵さんをご指摘されたとおり、経済効果を生み出すブーム的な現象というだけでは、コンテンツツーリズムの魅力を十分に説明できないように思われます。作品をきっかけとして町を歩き、作品をさらに理解し、その地域で生活するひとびとを知ることが何を意味するのでしょうか。

春の暖かい季節はコンテンツツーリズムに最適です。皆様もご自身のお好きな作品の舞台を探してみてもはいかがでしょうか。そこには新たな発見だけではなく、心を温かくしてくれる「つながり」の存在があるかもしれません。(牧 和生)

季刊「文化経済学会」 No. 84  
2013 年 3 月 31 日発行  
ISSN 0918-3787

発行 文化経済学会＜日本＞

発行人 清水 裕之

編集人 佐々木 亨

〒170-0004 東京都豊島区北大塚 3-21-10 アーバン大塚 3F  
(株) ガリレオ 学会業務情報化センター

E-mail : g018jace-mng@ml.gakkai.ne.jp

URL : <http://www.jace.gr.jp/>

© 2013, Japan Association for Cultural Economics